優秀幼児の指導

優れた性格を中心として——

森　重　敏

一　優秀児とはなにか

幼児期における優秀児、つまり本課題の優秀幼児の指導について考えるためには、「優秀児」とはどういう子どもであるか、まずその意味を明確にしておかねばならない。従来、よく使われていることばでありながら、この意味は、かならずしも一般に正しく理解されてはいないようであり、その解釈の仕方によっては、指導の方法も異なってくるからである。そこで、優秀児の概念規定から始めてみたい。

常識的な考え方

優秀児というと、常識的には、すぐれた子・頭のよい子・できる子・秀才あるいは神童といった言葉で意味されているようであるが、こうしたいい方は、それぞれニュアンスも異なり、その意義はあいまいで、誤解や混乱をまねきやすい。「すぐれた子」「できる子」といっても、何についていっているのか、ひじょうに多義的で、その内容が不明確のまま、優秀児が問題にされている場合が少なくないようである。

従来、学力中心の考え方が一般に行なわれて学業成績が優れていると、よく秀才扱いにされるが、成績だけで優秀児をきめる目安にはならない。なるほど、本来の優秀児は知的な素質に恵まれているから、みな学業優等生になれる資格はもっているが、しかしいろいろな原因から、優等生になれない優秀児もいる。と同時に、また、一般の普通児であっても、本人や家庭の努力によって優等生になれるものも少なくない。すなわち、優秀児のなかには学業優良児は多いが、学業優良児がみな優秀児ではなく、優秀児が必ずしもみな優等生ではない。

そのほか、身体的健康が特に優れた子どもを「健康優良児」と称するが、これも、本来の優秀児と異なることはいうまでも

ない。また、特に算数の計算に優れていたり、珠算や工作や習字に秀でているからといって、計算優秀児とか工作優秀児とか習字優秀児などとはいわない。あとで述べるように、特殊な能力に優れた児童であれば「特技児童」とか「特能児」と呼ぶのが普通である。

伝統的に行なわれていた神秘的な考え方からいわれる神童という言葉も、古来非凡な子どもをいい表わしたものであろうが、優秀児とは異なった意味が含まれていた。つまりこの言葉は何か特別の奇蹟によって生まれたものという語感を伴い、異常性を帯びた才能、あるいは奇形的な精神をさえ思い浮かばせたものであるが、これが「特殊才能」と結びつけて考えられる場合は、とくにそうであった。

これに対し、優秀児もしくは英才児という言葉は、普通の子どもたちと別に質的に異なるところはなく、ただ量的に、あるいは諸能力の全体的調和という点で、とくに優れていることを意味する。

したがって、従来、神童とか天才とかいう語につきまとっていた神経過敏症、異常性、偏倚性、あるいは神秘性といった諸特性は、優秀児あるいは英才児という平凡な呼び方によって払拭されなければならない。このような誤解は、優秀児の特質を正しく理解することによって、是正されるであろう。神童という言葉が、一般の辞書に明記されているように「才能のきわめて優れた児童」という素朴な意味だけをもつものであれば、神童も優秀児も本質的な相違はない。しかし、この場合、「二十歳過ぎればただの人」になり終ってしまうような十歳の神童や五歳の天才であってはならないことはいうまでもない。

本来の意味

このようにして、優秀児を規定する基底的な条件となるものは学力や特殊能力ではなく、「知能」を中心とした精神発達が考え方の基底とならなければならない。この意味では、優秀児は「知的優秀児」をいうのであり、知的劣等児、つまり精神遅滞児や青鞜児との対極において、比較的な用語として理解するのが妥当であろう。この場合、知能の優秀性を中心とした知的能力は、(1)同一年齢群の平均より明確に秀でており、(2)しかもそれは生まれつきで、比較的恒常的であると考えられる。つまり、思考・推理・判断などのいわゆる高等精神過程にすぐれていて、将来すぐれた業績を成しとげる可能性をもつ児童である。したがって、この優秀性が満足に発揮できるためには、その発現の条件として、性格や健康なども優秀でなければならない。実際、優秀児は、後で述べるように、ただ知能が優秀であるばかりでなく、同時に性格的にも身体的にもすぐれている場合が多い。すなわち、人格全体がとくに優秀な児童として、はじめて「優秀児」の名に値する。

このような見地から、優秀児の意味を規定するとすれば、次

のようにいうことができよう。優秀児とは、普通児に比して精神発達のきわめてすぐれた児童を意味する。この場合、一般に二つの意味がふくまれていて、一つは知能が全般的にすぐれた児童であり、もう一つは、美術・音楽などの特殊能力にすぐれた児童である。前者を知的優秀児、後者を特技児童と呼ぶのであるが、ふつう、優秀児もしくは天才児というときは、おもに前者を指す。

特技児童の場合でも、すぐれた一般知能がその活動の基をなしてはじめて、絵画、音楽その他の特殊部面に、よくそのすぐれた才能を示すことができるわけであるから、一般知能においても優秀な特技児童であってこそ、それは優秀児といえる。ただ、ある特殊能力のみに秀でた児童は優秀児とはいえない。

優秀児の意味を正しく理解するうえに今一つ注意を要することは、従来、早熟児あるいは早成児と呼ばれていたものと優秀児とを混同してはならないということである。早熟児・早成児は、とくに生活年齢に比して精神発達がいちじるしいため、ときとして優秀児と間違われやすい。早熟児は、幼少期における知的あるいは創造的発達の点から見ると、必ずしも他の児童より特別すぐれた行動を示さないが、一般に、年長児や成人のような特徴を表わしている子どもである。その早熟の内容は、必ずしも乳幼児期から心身ともにつり合って発達したものでなく、とくに社会的行動、態度、および思考などの表われ方に「ませている」ということである。これは特異な環境や特殊の訓練によって発達が促進される児童で、たとえば、絶えず成人とだけ接触している一人っ子の早熟、性的に刺激の多い環境に生活している児童の性的早熟のようなものである。このほか、内分泌腺の異常によって、異常発達をとげる早熟児もあるが、これはもちろん優秀児と異なるもので、医学的な措置を必要とする児童である。

このようにして、早熟児は、生涯の初期に精神行動のある方面が異常に急速な発達を示すため、児童期をすぎるころから、かえってしだいに減退してくる傾向がみられる。つまり、比較的早期に発達が停止する傾向をもつが、真の優秀児は、一般に一二、三歳後、加速度的にその知的優秀性を発揮するといわれる。事実、後述のように外国の調査結果をまつまでもなく、筆者の調べたわが国の場合においても、優秀児の優秀性はかなり維持されているのである。したがって、知的優秀性とその維持ということは、優秀児を早熟児から区別できる主要な特徴といってよい。また、知的優秀児や特技児童においては、知能指数（IQ）の高い水準、技能の優秀性それ自体は早熟を示すかも知れないが、それはむしろ将来への可能力というべきである。早熟児のなかに知能優秀な子どもがいることはたしかであるが、そうかといって、優秀知能が早熟の決定的要因となるのではない。むしろ、いろいろな原因によって「こましゃくれた」

行動や「小利口な」能度が現われたときに、成人の側から「早熟」だときめてかかる場合も少なくないのである。

このようにして、優秀児と早熟児と一致する場合があるかも知れないが、この二つの用語は必ずしも同意義ではない。優秀児を早熟児から見分けるとともに、優秀児が早熟児のまま終らぬように、優秀児の早期における正しい鑑別と指導とが肝要であろう。

二　優秀児の特性と指導

優秀幼児の指導のためには、優秀児一般の特質と個々人の特性とを見きわめる必要がある。優秀児の特質を理解するには、優秀児の知能のほか、彼らの背景、性格的、社会的、および身体的特性が十分に検討されねばならないが、ここでは性格特徴を中心に考察し、指導の問題に触れることにする。優秀児の個人的および社会的特徴の考察は、優秀児の本質に直接ふれる主要面として、もっとも重視されねばならないと思われるからである。

好ましい性格特徴

アメリカのターマンら（L. M. Terman, et al.）が多くの優秀児と普通児について、その親と教師に評定してもらった性格特徴をみると、優秀児は、常識・独創性・探求心・他をしのごうとする心、自信、ユーモア、正直、慎重深慮、まじめ、統率力においてすぐれ、大きい集団への愛情、うぬぼれがないこと、元気がよいことなどの点は、普通児とあまり違わない。また、コロンビア大学のヒルドレス（Hildreth, G. H.）の研究によると、優秀児は生活に張りがあり、精神力豊かで、活動的、快活であり、困難に耐え、疲労少なく、研究意欲・ユーモア・注意力・判断および推理力・進取の気性などに富み、独立的で、自信を持つなど、優秀児の「好ましい」特性は普通児のほぼ五倍もあるのに対し、「好ましくない」特性は逆に普通児の方が優秀児の約五倍になっている。

このように、優秀児は、普通児に比べて多くの性格的特徴にめぐまれており、さらに、両者の性格特徴の違いは満五歳のときがもっともいちじるしいこと、つまり、優秀児の優秀性がこのころに目立つことも、注目すべき点として指摘されている。

優秀児の好ましい特性については、先年、筆者の試みた研究の結果からも示すことができる。好ましい特徴、好ましくない特徴それぞれ三五項目からなる性格特徴検査で、実験校で検査を行なった結果、担任教師が評定した、優秀児の「好ましい」特性は、普通児の二・四倍もあるのに対し、「好ましくない」特性は逆に普通児の方が優秀児の二倍になっている。父兄による評定結果も同様な傾向を示している。そのうち、(1)教師と親両方の評定が一致して多かった特性――物事を知りたがる、記憶力に富む、理解が早い、言葉が豊富で明瞭、判断推理に富

む。(2)教師の評定で多かった特性――人気があり、尊敬される、自信がある、統率力がある。(3)親の評定で多かった特性――生活に張りがある、注意集中力がある。

要するに、こうした優秀児にもっとも多く見られる性格特徴は、好ましい特性がひじょうに顕著で、生活に張りがあり、つねに向上心にもえているようである。

その他の性格特性

またこれらの優秀児に基本的欲求検査を行なって調べてみると、優秀児は、成就・独立・罪をさけるなどの欲求、学校事態での欲求が、普通児に比べて強いものが多く、性格興味型の検査では、優秀児は高度の理論、審美の興味型を示すものが比較的に多い。ロールシャッハ・テストの結果では、優秀児は知的能力に優れているばかりでなく、豊かな想像や興味、分析的な把握に優れ、環境に敏感で情緒的表現が豊かであり、情動の統制も強く、また創造的で内面的でもある。ＹＩＧ性格検査では、優秀児は情緒がより安定していて、内向劣等感や気分の変化はあまり見られず、抑うつ性や神経質の傾向も比較的少ない。性別に見た場合、女子優秀児群は支配性に富み、より活動的で、社会的外向の面もすぐれているが、この面で男子優秀児はやや消極的内向的である。集団ＴＡＴ、ＳＣＴその他の検査によっても、優秀児は一般に興味活動が質量ともに優れ、合理的、論理的思考に富み、社会的適応もよく、活動的で情緒が安定している。

また、村山貞雄氏の調査によると、天才級幼児の性格特徴として、エネルギーの強さ（自我が強い、物事に熱中するなど）、性格のもろさ（感受性強く、神経質など）、情緒のあかるさ（明朗、やさしいなど）、行動思考の正確さ（まじめできちんとしている、ハキハキしているなど）、思考のあかるさ（記憶力、創作欲があるなど）などがあげられているが、やはり、多くのすぐれた特性を幼児期に示していることがうかがえる。

優秀児のこのような特性のうちでも、とくに注目すべきものの一つは「物事を知りたがる」という特性である。先述のように、教師と親が共通して認めている性格の一つであるが、筆者の最近の別の調査研究（二十六年前の大阪市における抜群優秀知能児の追跡研究）で、成人した優秀児に自分の幼児期の性行を性行評定尺度で自己評定してもらったのであるが、多くの優秀児が顕著だった特性としているのは、この「物事を知りたがる」項目である。他方、担任教師による優秀児の小学校時代の性行観察の結果と照し合わせてみても、前記の特性を含め、推理・理解・記憶力・判断力・注意力・自制力・言語・快活・自信・綿密・温和・統率力などにおいて、ほとんど全部の優秀児が、「好ましい」性行をもっていたことがわかる。壮年に成長した今日、いうまでもなく、彼らは、（ＹＧ性格検査を本人について検査して行なったのであるが、その結果によっても）情

緒的に安定し、適合的に適応の傾向にあるなど、好ましいパーソナリティを持し、中堅として社会の各分野で活躍中である。

このようにみてくると、将来の社会的活動へ発展させるものは、すぐれた知能のほかに、多くの要因の働きと思われるが、その諸要因の中でも、すぐれた性格に負うところが少なくないと考えられる。しかも、幼児期の好ましい特性が、成人に成長した本人の今日のパーソナリティの発達に、そして展開されるそれぞれの活動に大きな影響を及ぼしているのである。

この意味で、すぐれた資質を伸ばし、調和ある人格を発達させることは、優秀児の指導上きわめて重要な問題である。知的な指導ではなく、性格指導こそ、優秀幼児に対して行なわれなければならないものであると思う。

三　適応の問題と指導

これまでの考察でわかるように、一般傾向として、優秀児は性格的にすぐれており、情緒的にも安定している。つまり、集団的に見ると、優秀児は不適応児ではない。しかし、個人的に見た場合には、性格上の個人差はとくにいちじるしく、また優秀児のみが、情緒的、社会的不適応から解放されるとはかぎらない。優秀児のなかにも、普通児に見かけるような神経質、過敏質その他の性格疾患といった体質―情緒的な問題や、うそつき、盗みといったまれな社会的な問題も起こることがありうる。優秀児であっても、基本的な要求が満たされないときにフラストレーションに陥って、不適応を招く恐れがあることは、一般児の場合と変りはない。

ホリングワース（Hollingworth）によると、ＩＱ130～150の優秀児は好ましい適応の世界を見出し、大きさ、強さ、健康、美しさにすぐれ、情緒的に安定し、好ましい性格をもち、また信頼を得て、指導者となる傾向があるが、ＩＱが150以上になると、その傾向はいくぶん薄らぐという。ＩＱ180もしくはそれ以上もあるような子どもは、普通児より遊び好きで、遊びの知識も豊富、勝負ごとも好きで、言葉も一般児が分らないような語いを使うという調子であるから、普通児との理解が困難となり、同年輩の気心の合う友だちがつくれなかったり、幼稚園の生活がおもしろくなくなって、通園がいやになったりする。むずかしいことを質問したり、考えたりする優秀児もいる。そこで、優秀児にもできるだけ活動の自由を与え、同輩と遊ぶ機会を多くしてあげることは何より必要で、友人から認められ、仲間入りしたい要求が満たされて安定感を持たせることが大切。他方、親の溺愛から起こり勝ちな自己本位の考え（自己中心性）やうぬぼれの傾向に対しても注意する必要があろう。情緒的統制や社会的適応は、親の態度や反応関係などから得られるからである。

（東京家政大学）